

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成21年 2月 第96号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

世界一長寿国と超少子化

日本人の平均寿命は、女性 86.9 歳、男性 79.1 歳。一人の女性が生涯で産む子供の数(合計特殊出生率)は 1.36 人。女性一人が二人出産して同じ人口が保てるのであり、日本は一昨年より人口減少社会になりました。このままで推移すると、百年後には日本の人口は 5000 万人前後になると予測されています。その百年後は?と考えると、日本社会は崩壊に向かっていると言わざるを得ず、超高齢化の裏側で進行する超少子化に歯止めを掛ける必要性を強く感じます。

昨年、後期高齢者医療制度に対して、『残酷な姥捨て山』との批判がありましたが、姥捨て伝説を描いた『檜山節考』は、山で死を覚悟する姥の裏側で、孫の嫁が身ごもり、貧しくも次の世代が引継ぐ場面で終わっています。貧しい社会の中で古希を迎えて、何年も掛けて準備をして山に赴く姥の覚悟と、それに応える息子や孫の暮らしを描き、『長い人生を締め括る思想と覚悟』を高齢者がしっかりと示す時、その裏側で新しい生命が誕生し、社会を引継ぐ次の世代が育って行くことを示唆しています。

片や今、世界第二位の経済大国日本で、少子化傾向が止まらず、歯止めを掛けるきっかけもつかめません。1.36 という数字は、高齢者が『死』の意味と価値について確信が持てずに準備を怠り、『死』を避けるべきリスクとしてのみ捉えている現状への警告ではないか、と強く感じます。

『高齢者の尊厳を支えるケアの確立』を目指す仕組みの中で働く介護職としては、『高齢者の尊厳』とは何か、を特定して共通理解を深め、新しい生命の誕生へとつなぎ、次の世代に引継ぐ社会を実現したいと願います。

自然の摂理の中で老いを迎えた高齢者には、長く生きた生命を自然物として完結させる義務があり、社会の一員として、次の世代に引き継いで人生を締め括る責任を負います。高齢者にとっての『尊厳』とは『長寿の人生を締め括る思想と覚悟』だと実感しています。締め括る準備に寄り添い、覚悟を支え、最期を見届ける介護職でありたい、と願います。

せいりょう園 渋谷 哲



ピノさんが死んだ

アメリカを知らないアメリカ人が教えてくれたもの

2月2日(月)の朝、『ピノさんが亡くなった』と報告を受けました。介護タクシーの運転手が迎えに行った時に亡くなっているところを発見し、これから検死が始まる、との事でした。

ルイス・ジョセフ・ピノー、79歳。上海に生まれて育ち、22歳で日本に移住して神戸の須磨で暮らし、阪神淡路大震災で被災。北区の施設に緊急避難した後、10月に緊急ショートステイでせいりょう園に来られました。半年ほど園で暮らした後、街での暮らしを希望して平成8年5月、神戸の垂水に出来た障害者用の住宅に入居されました。

脊髄性小児麻痺で下肢が動かず、上肢も不自由な彼は、太って熊のように見える大きな上半身を電動車椅子に乗せ、夜も車椅子で眠り、障害のある手で電動の車椅子を器用に操り、動き回っていました。

先天的に障害がありながらも、明るく積極的で自己主張が強く、理屈に合わないと思う事には中々納得せず、日本の介護現場では異色の人でした。『僕はアメリカを知らないアメリカ人よ』と自己紹介し、障害のある少年を社会の中へ引っ張り出して、明るいアメリカ人として教育してくれたお父さんへの感謝を、ピノさんはよく口にされていました。

入所して4日目に、一人で加古川駅前のデパートに行こうと電動車椅子で出発し、半ばの加古川市役所近辺で歩道の縁石に乗り上げて転倒し、骨折されました。しかし『リスクのない生活なんて楽しくないよ』とその後近所のサティなどへの外出が絶えず、渋滞気味の2号線を旗を立てた車椅子で堂々と動き回っている姿が目につかびます。

神戸に帰ってから数年間は、年に1～2度せいりょう園の催す音楽会に来る程度のお付き合いでしたが、平成16年の頃よりデイサービスの利用が始まり、最近では、月曜・水曜のデイサービスの入浴利用と時々のショートステイ利用になり、昨年末から正月にかけてもショートステイを利用されたところでした。そして2月2日もデイサービス利用の予定日でした。

障害のある体で積極的に電動車椅子で動き回り、園内で利用者やドアとの接触事故も起き、ヘルパーの選り好みも激しく、自由な行動への束縛を嫌い、現場職員との衝突も少なからず生じました。彼は理路整然と主張し、こちらの説明に納得すれば素直に引き下がり、納得できない場合には次なる手立てで対抗します。交渉の過程は、彼にとっては楽しみのものであり、それこそが生活意欲の素なのだと感じました。多くの不自由さを抱えながらも、リスクを恐れず何事にもチャレンジし、明るく物怖じしない積極性に触れる中で、生活の主体者として自らの暮らしを決定する自由の大切さや、アメリカ的な物事の捉え方を沢山、ピノさんから学んだように思います。

暮らしの中で事故や紛争はあって当たり前の事、それを事前に無くそうとする対策は自由への束縛になり、事後の適切な対応こそが大切と主張。その対応を巡っては、お互いに自己主張をしながら妥協点を探ることになり、議論の中で妥協する事の苦手な日本人には貴重な経験でした。

日本の介護現場は今、心身の機能が徐々に低下し、日々不測の事故が起こり易くなって行く高齢者の側において、事故の責任の多くを介護職に求める世間の風潮の中で、介護現場が疲弊し介護職が疲労しています。離職率も高くなっています。生活の場における、生活の主体者としての自由と権利と責任について、ご家族や当事者を含めてももっとも様々な側面から議論し、議論の過程で妥協点を探る経験を積む事が、介護現場でこそ必要なのだと感じています。

お互いに自己主張をしながら議論を通して妥協点を探る中で、理念と生活実感に合致する社会ルールが確立して行き、法制度にもつながっていきます。ピノさんのように、交渉過程を楽しむ姿勢を学ばねばならない、と強く感じます。日本では今、アメリカの陪審員を模した裁判員の制度が始まろうとし、国民の多くが戸惑いを覚えています。これもピノさんなら、喜んで裁判員を引き受けるように思います。

1月最終の水曜日に出会い、挨拶を交わしたのが最後になりました。いつも俯き加減の顔が、いっそう下を向いていて、機能低下が随分と進んでいる様子が伺えました。そして2月2日の朝、自分で決めた生活サイクルの中で、暮らしを支えてくれた介護スタッフに最期を委ねて、自らの人生を締め括った姿は最期の瞬間までピノさんらしかった、と感服しています。

様々に交渉を重ねながらも、最期まで暮らしを委ねた神戸のケアマネジャーと多くの介護スタッフの中に、せいりょう園も含まれていた事を感謝しています。これからは何不自由なく天空を飛び回りながら、偶にはせいりょう園をのぞいて下さい。春と秋のコンサートも必ず聴きにきて下さい。

ピノさんのご冥福をお祈り致します。

せいりょう園手作りの
お節料理で元旦を寿ぐ
ピノさん

(1996. 1. 1)



植村直己の冒険と認知症の方の徘徊について

地域支援センターのぐち南

吉田 知一

せいりょう園では、日中、玄関のカギを閉めることはありません。利用者が徘徊され、外に出られたとしても止めることはありません。外に出たことを職員が気づくことが出来れば、後ろから着いていって見守りをする事になっています。これは、単に拘束をしないというだけではなく、我々と同じ一人の人間として尊重し、外を歩くという権利と責任を護っているという姿勢の現れだといえます。

この理念は、胸をはって本当に素晴らしいなと思っています。しかし、ふと疑問になることがありました。

「もし、認知症を患っている方が徘徊し事故に遭い、車にひかれて死んでしまった場合、それでも本人の権利と責任を尊重できるのだろうか？」

その疑問について園長の話聞く事が出来ました。園長は、冒険家の植村直己さんの話をしてくれました。

植村直己さんは、世界的に有名な冒険家です。数々の偉業を成し遂げた後、厳冬期のマッキンリー単独登頂の際、遭難し消息を絶ったそうです。登っては危険だと言われている雪山の登山を一人で登るということは、普通であれば無謀なことです。しかし、彼のとった行動、チャレンジは感動さえ与え、賞賛され、認められています。消息を絶った後、国民栄誉賞が贈られたほどです。

園長曰く、植村直己の無謀にも見える冒険は、認知症を患っている人が徘徊して歩いていることと同じく冒険なのだ。その結果、待っているのが死であるのだとしても、それを本人が一生懸命生きた上でのチャレンジであったと、寛容に認める必要があるのではないか、とのことでした。

植村直己のチャレンジ＝認知症の方の徘徊。はたしてそうなのだろうか？植村直己のチャレンジと認知症の方の徘徊はイコールなのだろうか？私がひっかかったのは、チャレンジの大小ではなく、同じ「死」という結末に対する周りの反応があまりにも違いすぎることでした。

たとえば、認知症を患っている方が自分の力で一生懸命生き抜いてチャレンジしたとして、その結果、交通事故で亡くなった場合。車でひいてしまった人がいる訳です。この場合、加害者と呼ばれるのは、車に乗っている人になります。その人はどんな気持ちだろうか。一生懸命生きた結果だから・・・チャレンジした結果だから・・・と割り切れるだろうか。そして、後ろから着いていく介護職員はどう思うだろうか。責任を感じないだろうか。後悔をしないだろうか。

認知症を患っている方と植村直己のチャレンジの姿勢という意味では、イコールなのかもしれない。でも、この二人の「死」に対する周りの価値観はまったく違うものになっている。認知症の方の徘徊は価値のある行為だと、なかなか思えない。この違いは何だろうか？そもそも植村直己の冒険、チャレンジとはどういったものだったのか？私はリアルタイムで彼がどんな冒険をしていたのか、良く知りません。その当時の

植村さんの冒険に対する皆さんの反応が、どういったものかも知りません。

私は、急に彼のことが気になりました。そこで彼のことを少し調べてみました。



植村直己さんは、1941年2月12日、兵庫県城崎郡日高町、現在の豊岡市で生まれ育ちます。1960年に明治大学農学部に入學、山岳部へ入部してからは登山に没頭。1964年5月2日大學卒業後、就職試験に失敗。アルバイトで貯めたお金を元手に、周囲の反対を押し切って

横浜港から移民船「あるぜんちな丸」に乗り込み、アメリカ・ロサンゼルスへ向かいます。到着後、苦勞して職を得るがすぐに不法就勞でつかまってしまうますが、なんとか強制送還を免れヨーロッパへ向かいます。フランスのシャモニーのモルジンスキー場で冬季オリンピック滑降金メダリストのジャン・ビュアルネに雇われ、ここで資金を稼ぎながら登山活動の拠点としました。

1966年7月モンブラン単独登頂に成功、10月24日アフリカ最高峰キリマンジャロの単独登頂に成功。続いて1968年には南米最高峰のアコンカグア単独登頂に成功する。このあと、アマゾン川のいかだ下り6000kmの冒険を経て、北米最高峰のマッキンリー登頂を目指す。単独登頂の許可が下りず断念。4年5ヶ月ぶりに日本に帰国する。

日本山岳会が、エベレスト登頂隊派遣を決定、これに植村さんも参加。自己負担金を用意できず、荷揚げ、ルート工作要員としての参加であったが抜群の体力等が認められて第1次アタック隊に選ばれ、1970年5月11日エベレスト登頂に成功する。しかし、大量の隊員を荷物運びとして使い、ほんの一握りしか登頂できない極地法による高所登山に疑問をもつ。同年8月、エベレスト登頂の勢いを借りて再びマッキンリーに挑戦、単独登頂を成功させる。この時点で世界初の五大陸最高峰登頂者となった。

この頃から植村さんは南極横断への夢を抱き始め、少しずつ実現のための準備に入っている。1971年8月、南極横断距離3000kmを体感するため、同距離となる北海道稚内から鹿児島までの国内縦断を徒歩51日間で実現する。以後、植村さんは単独登山・単独冒険へと傾倒します。グリーンランド北部のエスキモーとの共同生活を経たのち、1974年12月から1976年5月まで1年半かけての北極圏12000kmの犬ぞり探検に成功。

1980年、エベレストの厳冬期登頂を目指して植村さんを隊長とする日本隊が編成されるが、隊員の事故死、悪天候により登頂は断念する。1982年、南極点単独犬ぞり探検が、フォークランド紛争勃発により断念。

2度の冒険の失敗に初心に戻る決心をした植村さんは、野外学校設立を夢見、勉強を兼ねてアメリカの野外学校に参加するため渡米。ついでにアラスカでマッキンリー登頂を目指す。

1984年2月12日、世界初の厳冬期マッキンリー単独登頂を果たす。植村さんの43歳の誕生日でした。しかし翌2月13日に行われた交信以降は連絡が取れなくなり、消息不明となる。そして現在に至るまで遺体は発見されていない。このため、最後に植村さんの

消息が確認された1984年2月13日が、植村さんの命日とされた。享年44歳。1984年4月19日、国民栄誉賞を受賞。

植村さんの残した言葉で印象に残った言葉がありました。それは「大切なのは、夢の大小ではなく、そしてその結果でもなく、その夢に向かってどれだけ心を懸けることが出来たか。その心の大小が重要で、そこにこそ幸せがある。」という言葉です。結果よりもプロセスを大事にし、自分自身が自分自身に満足するという自己実現にこそ幸せがあるのだと。植村さんのように、五大陸最高峰登頂や北極圏縦断など超人的なことが出来なくても、私達の身の丈に合った冒険にどれだけ心を込めることが出来るのか、だと感じました。だとするならば、認知症を患った方の徘徊というのは、自分自身の力を精一杯出して、冒険をしているのかもしれない。どちらにしても、植村さんも認知症の方の徘徊もリスクと隣り合わせでハラハラするのは事実です。それはそれで心配だったりします。それでもなお、その冒険を、その人を、尊重できるだろうか？

その件に関して、最も植村直己の近くにいた奥さんの公子さんの言葉が印象的でした。植村さんが、フォークランド紛争の影響で南極縦断を断念せざるを得なくなった時、公子さんとの無線連絡のやりとりで「結局は誰がなんといっても自分のことなんだから、自分で判断して、道を切り開いてください。」という言葉が出るように、植村直己という人間をとことん尊重しているのだなと感じました。

私が個人的に考えた結論ですが、植村直己の冒険と認知症の方の徘徊は、一人の人間として捉えた時に、同じ権利として認められることなんじゃないかと思うのです。植村さんの冒険にしる、認知症の方の徘徊にしる、その先にあるものが「死」であるかどうかなんて、その都度結果は誰も分からないのだと思います。ただし、「生きる」ということを大きなテーマとしてチャレンジしているのだと感じました。だからこそ、認知症の方の徘徊に関してもチャレンジは尊重して、本人の身の丈に合った冒険をしてもらい、ダメだと思ったら引き返せば良いのかと思いました。職員が後ろから着いて行く際も、その人との距離はケースバイケースで、その人に合った距離をとってあげれば良いのだ、と思います。そして、困った時には暖かく迎えてくれるような、寛容な地域であればなと思うのです。もっともっと、その都度、議論が必要な内容なのだと感じました。

せいりょう園待機者状況

<平成21年 2月17日現在>

入所判定済み者 316名 グループの内訳
グループ...122名
グループ...131名
グループ... 63名

○入所判定済み者の現在状況

在宅121名 / 特別養護老人ホーム入所中7名 / 医療機関入院中84名
老人保健施設入所中94名 / ケアハウス入居中3名
グループホーム入居中7名

辞退その他：他施設入所1名 / 死亡 6名



平成21年、本年最初の仏教講話は鶴林寺・真光院の吉田ご住職に来て頂いた。例によって前以って Internet で検索する。

鶴林寺自体の建立は聖徳太子の時代に遡ることができるが、幾多の栄枯盛衰を経て現在は三塔頭(浄心院、宝生院、真光院)が残る。塔頭(たちゅう)とは高僧の塔があるところ、転じて大寺に所属する別坊(広辞苑より)。以前に講話を受けた幹ご住職は宝生院のご住職である。紙面の関係で今回は詳細を記せないが興味のある方は是非 Internet で検索して頂きたい。

講話は予定時刻を少し過ぎてから始まった。ご住職は何枚かの紙片を持参されていたが、先ず最初に五輪塔を形取った絵(形の違った石を5つ縦に重ねたもの)を提示される。是は何かと問われるが誰も即座には答えられないでいた。次いで木製の塔婆(トウバ)を示される。是が何かはすぐに理解できたが、よく見ると4つの切り込みよって5つに分かれている。これは5つの石を積んだものと同じ意味をもち、身体を表すと話される。その違いは五輪塔は仏塔とも呼ばれこれは仏様の身体を表し、塔婆は(亡くなった)人の身体を表す。塔婆の裏には5つの凡字が刻まれているが、それは上から空・風・火・水・地と書かれている。

ここで話を変えられて「私達は何処から来て何処へ行くのでしょうか」と問われる。そしてこの事は、空・風・火・水・地で説明(解決)できると説かれる。「我々が食事を取るとき、それはあらゆるものから、あらゆる所から得ているのです。地は地面、土地を。水は水、水面を。火はエネルギー、熱を。風は空中に漂うもの。空は更に上空にあるものを指します。即ちこれは自然界そのものなんです。人が生を受けるのも、成長していけるのも全て自然界の恩恵を受けています。そして人は亡くなると形は無くなりますが、無形のものとなって自然界に帰っていきます。ある物は地に、ある物は水中に、又ある物は風に乗り、上空高く舞い上がり宇宙を漂うのです。」

仏教の世界では、仏様がまさにその宇宙そのものなのだと。

奈良の大仏様の話をされる。我々から見れば大変大きなものであるが、本来は大仏は仏塔即ち仏様の身体を表そうとして作られたものであれば、甚だ小さい限りとなる。従って本当の仏様は決して像ではなく宇宙全体を指し、無限に広がる存在なのだと。奈良の大仏様を建立された聖武天皇ご自身としては当時のありとあらゆる英知と富と権力を最大限に駆使されたのであろうし、その難儀さは父親に連れられて観に行った映画「大仏開眼」から私自身も子供心に残っている。

最後に一昨年、年間CD売上枚数1位になった秋川 雅史の「千の風になって」を紹介される。

“ 私のお墓の前で泣かないで下さい。そこに私はいません、眠ってなんかいません。

千の風に 千の風になって、あの大きな空を吹きわたっています。”

亡くなって自然界に戻っていった身(?)は正に「風」に乗ってあらゆる所を漂っている。

(次ページへ続く)

(前ページより)

この歌では「風」になっただけだが、ご住職はこれ以外の「地・水・火・空」についても同じことが歌えるのではと話される。

人は自然界からやって来て、自然界のあらゆる恵みを精一杯受け、又自然界に戻って行く。そしてそこから後人達を見つめ、包み、守って行く。人はその気になれば、いつでもどこでも先人達を意識することは可能なのだと。心に残る講話でありました。有難うございました。

ケアハウス等空き情報 <平成21年2月13日現在>

ケアハウス

・ 恵泉	: 若干	・ 青山苑	: 1 人部屋 4 室
・ 第二ケアハウス恵泉	: 若干		: 2 人部屋 1 室
・ むれさき苑	: 1 人部屋 1 室	・ アゼリア	: 1 人部屋 3 室
・ めぐみ苑	: 1 人部屋 2 室		: 2 人部屋 2 室
・ せいりょう園	: 1 人部屋 4 室	・ シスナブ御津	: 1 人部屋 2 室
・ 清華苑SPA ライフ	: 1 人部屋 1 室	・ あさなぎ	: 1 人部屋 1 室

バリアフリーマンション

リバティかこがわ 1 室

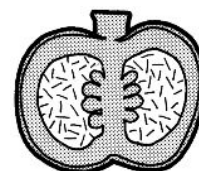
[問合せ先]せいりょう園介護相談室

(079)421-7156/(079)424-3433

せいりょう園2月の行事

2月 2日(月) 仏教講話	2月16日(月) 美容の日
2月 4日(水) 音楽療法	2月18日(水) 音楽療法
2月 6日(金) ひより手芸教室	2月20日(金) ひより手芸教室
2月 7日(土) 園長との懇談	2月23日(月) 理容の日
2月11日(水) 音楽療法	2月25日(水) 郷土料理(ほうとう)
2月13日(金) 昼食会(お好み焼き)	2月27日(金) 介護者の集い
2月14日(土) バレンタインデー (チョコプリン)	~風邪の予防になる食事~

郷土料理 ほうとう



ほうとうは、山梨県(甲斐国)を中心とした地域で作られる郷土料理。

小麦粉を練った平打ちの麺を野菜と共に味噌仕立ての汁で煮込んだ料理の一種である。一部地域では小麦粉以外の穀物の場合もあり、また形状は麺でない場合もある。呼称は「ほうとう」が一般的。一部地域では異称として「おほうとう」や「ニコミ(ニゴミ)」「山梨県内郡内地方の一部」、「ノシコミ(ノシイレ)」「山梨県内河内地方」と呼ぶ場合もある。

(「ほうとう」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』より)